

育児期女性の生活・家族感情 学歴と就労との関連から

聖セシリア女子短期大学
文京学院大学

目良 秋子
柏木 恵子

Women's feeling about their lives in their child-care — The relation between education and work —

St. Cecilia Women's Junior College MERA, Akiko
Bunkyo Gakuin University KASHIWAGI, Keiko

本研究は、性役割に関する意識が変化しつつある現代において育児を行う女性たちが子育てに対して、また家族に対してどのような感情を抱いているかを明らかにすることを目的としている。育児期女性の生活・家族感情について因子分析を行った結果、「良好な夫婦関係」「生活への不安・焦燥感」「子育てへのネガティブな態度」「子育ての楽しさ・喜び」の4因子が抽出された。この4因子について学歴と就労コースとの関連を分析した結果、仕事を辞めず継続して働いている女性は仕事を子育てのために中断した女性よりも自分自身の生活に対して不安や焦りを感じていないことが明らかとなった。また、学歴が高い育児期女性ほど夫と良好な夫婦関係を築いているという認識をもつことが示された。一方、退職専業主婦の生活への不安や焦燥感が高いこと、子育てに対してネガティブな態度をとりやすく、育児期専業主婦の生活・家族感情における問題があらためて示された。

【キー・ワード】 育児期女性・学歴・就労コース・生活への不安・子育てへの態度

This study was conducted to clear what women who take care of their infants feel about their lives. It was cleared that women who retired their job in order to raise their child up feel more anxious and impatient about their life and feel more negative against their child-raising than women who has worked without retiring because of their child-raising. And also it was cleared that academic background influenced to women's feeling. Women who have high educational background communicate well with their husbands.

【Key Words】 Women who take care of their infants, Educational background, Life-course, Anxious for their lives, Attitude for their child-raising

問 題

現代の女性がどのような生き方を志向するかは、医学技術や工業技術など様々な分野における変化発展により大きな影響を受けつつある（東・柏木，1999）。なかでも、結婚や子どもが生まれた後の家族生活については従来の“伝統的性役割観”に基づいた価値観から新しい価値観へと変化する過渡期にある。

こうした変化を促す要因の一つとして女性の高学歴化がかねて指摘されてきた。近年、大学へ進学する女性は増加し、1990年は15.2%であったのが、1999年には29.4%となっている一方、短大進学率は下降しており、高学歴化は著しい（文部省，1999）。

ところで、高学歴化がもたらした性役割観に関する価値観の変化は、女性の態度・行動にどのような影響を与えたのだろうか。男性の場合、高学歴化は社会移動¹を実現するものと捉えられてきたが、女性の場合は進学率が伸び始めてしばらくの後も高学歴者は結婚・出産後の就労継続する生き方よりも家庭責任の主体としての生き方を選択する者が多かった（中村，1999）。このことについて中村は、社会に流通する高学歴の女性に関する独特な意味づけを人々が共有してきたことによると指摘する。つまり、女性の高学歴は、「家庭をもち子育てをするときに、教養ある母親として子どもの正しい養育や教育を行い、家庭を守る力を養うためのもの」と捉えられていた。

しかし、子どもを育て上げた中年期女性が空の巣症候群などの問題を生じることもし少ない。最近の中年期夫婦のコミュニケーション態度研究からも女性の問題が指摘されている。長らく日本の社会では、女性は従順で家庭においては夫に従う者という考えが支持され、多くの女性もそれを受け入れてきた。しかし、平山・柏木（2001）によると、夫が威圧的で、妻がその夫に依存・共感するという夫婦不平等なコミュニケーション形態の場合、夫は妻にネガティブな感情を喚起させる。妻側は夫に言いたいことを言えず、聞いてもらいたいことを聞いてもらえないという夫婦のあり方が続けば、妻に不満や不平を感じさせることになる。

一方、現在育児期にある女性は日常の生活に対してどのような感情を持っているだろうか。これらの女性が教育を受けた時代は、女性の学歴志向への社会の意味づけは中年期女性が若かりし時代とは異なり、女性の社会移動志向への理解も進んでいたであろう。子どもに良い養育・教育をし、家庭を守るためだけでなく、女性自身の自己実現を可能とする教育を受けてきた。学生時代に留学する、あるいは職業選択の範囲が広がるなど、男性と同様の社会移動に向けた機会を女性も得てきた年代と言えよう。田中（1997）は、学校教育は性別分業を変化させる要因と捉え、特に高学歴化の効果を検証した。その結果、教員層を除けば女性のフルタイム継続就労への学歴の効果は非常に弱いながらも、学校教育が性別分業を流動化をさせる機能を潜在的に持っていることを確認している。こうした価値観変革期を過ごした育児期女性は、家庭責任の主体としての高学歴女性ではない、社会移動を目指す新しい女性像を模索する途上にあると言えるのではないだろうか（中村，1999）。

本研究で問題としたいことは、価値観の移行期にある現代の育児期女性が自分自身の生活に対して

¹ ここでの社会移動とは、個々人が階層の境界を越えて階層的地位を変えることをいう。

もつ感情についてである。女性が結婚・出産後仕事を辞め、専業主婦であることは一見女性の幸せと思われてきたが、実はその陰でいいような不安や焦り、拘束感といった否定的な生活感情をもっている（永久，1995，柏木，2003）。この問題は学歴という性別分業を流動化させる要因から検討する必要があると思われる。また、高学歴化により様々な選択肢から自分の生き方を選択する自由や機会を与えられてきた女性が、まだ手のかかる幼児を養育しつつ就労する、あるいは就労しないという選択をすることで、どのような気持ちをもその生活に対してもっているのかについて検討する。

方 法

質問紙方法：

埼玉県内の幼稚園、保育所を通して、通園する幼児の父親と母親それぞれに返信用封筒を添付した質問紙を園児を通して配布し、後日園児を通して回収した。

調査対象者：

県在住の3歳から4歳の幼児をもつ母親と父親の夫婦2887組²である。本研究の分析対象は、今回の研究目的に適った有効回答1366名の母親に限定する。

調査期間：

2002年11月に配布、回収を行った。

調査内容：

母親と父親それぞれの調査内容のうち、研究目的に適った母親の質問は以下の通りである。育児期女性の子どもや夫、あるいは子育てなどに対する感情・意識を問う「生活・家族感情」の42項目をはじめ、働くことに対する考え方「就労への態度」を問う42項目、現在働いていない専業主婦の就労意識を問う12項目、育児期女性が利用できる「ソーシャルサポート」に関する4項目、生活満足度、および社会経済的屬性、学校卒業以来のライフコースなどを問う質問を加えたものから構成されている。

本稿では、母親の生活・家族感情尺度から抽出される因子を確定すること、ならびにそれら各因子について母親の属性、特に学歴および就労状況における分析を中心に報告を行う。

結 果 と 考 察

(1) 母親の社会経済的屬性：

今回調査の対象となった母親は、平均年齢34.3歳（SD4.30，Range20歳～47歳）であり、5歳ごとの分布をみると31歳から35歳のものが最も多い。学歴の分布は、図1のとおりで高校卒が最も多

² 質問紙の配布数は父母ともに2887、回収数（率）は父親1097（38.0%）、母親1371（47.5%）、そのうち有効回答数（率）は父親1096（38.0%）、母親1366（47.3%）であり、夫婦ペアで分析可能な有効回答数（率）は1062組（36.8%）であった。

く次いで専門学校，短大，大学の順で，高校卒業後何らかの学校へ進学しているものは全体の 65% であった。

現在の就労形態は，フルタイムが 45%，パートタイムが 33%，専業主婦が 22% であった。家族形態については，核家族が，全体の 77%，拡大家族が 16%，その他が 7% となっていた。子どもの数は 2 人が 57% と最も多く，次いで一人で 25%，3 人 16%，4 人 2% であった。

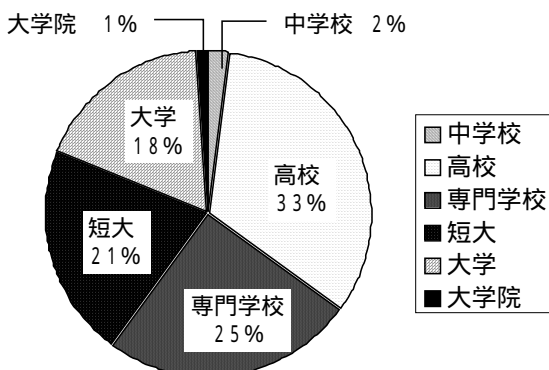


図 1 最終学歴の割合

(2) 生活・家族感情尺度の因子の確定：

育児期女性が自分の生き方や夫・子どもとの関係について抱いている感情を把握するために作成した 42 項目への回答について，主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。抽出された因子において因子負荷量が .40 より低い項目，あるいは複数の因子において負荷量の差が .10 未満の項目を削除し，33 項目を精選した。そして，これらの項目において上記の基準により再度因子分析（バリマックス回転）を重ね，4 因子を抽出した（表 1）。第 1 因子の信頼性係数が .641 とやや低めではあるが，これら 4 因子を生活・家族感情尺度とした。³

第 1 因子は「夫はこれからも私を大切にしてくれる」，「夫は私の話をよく聞いてくれる」など夫への信頼感や夫婦相互理解を表す項目からなっているところから，「良好な夫婦関係」と命名した。第 2 因子は「今の生活には『自分』というのがないような気がする」，「本当にやりたいことをやっていない焦りや不安を感じる」など，現在の生活全般における空虚感や将来に対する不安を表わす項目からなっていることから，「生活への不安・焦燥感」とした。第 3 因子は「自分の気分で子どもに感情的にあたる」，「子どもがちゃんとしてくれないと，私が困る」など，感情制御できない，子どもに不適切な養育態度をとるという項目からなっていることから，「子育てへの否定的な態度」と命名した。第 4 因子は「子どものことがかわいくて仕方がない」，「子どもの成長に最も喜びを感じる」など子どもへの愛情や，子どもとの関わりでの幸せな気持ちを表わす項目からなっているところから，「子育ての楽しさ・喜び」とした。以下の分析では生活家族感情の下位尺度得点として，各因子における項

³ 本分析対象者は夫婦 1063 組の妻のデータであるが，多くのデータを使用することで因子構造が安定するため，夫婦ペア以外の母親のみのデータをも含め因子分析を行った。

目の粗点（1点～4点）の合計を項目数で割った得点を用いた。

表1 妻の生活・家族感情の因子分析結果

項 目				
夫はこれからも私を大切にしてくれる。	.853	-.077	-.028	.095
私は夫を信頼し、尊敬している。	.821	-.087	-.005	.040
夫は私の悩み事を、親身になって一緒に考えてくれる。	.792	-.096	-.031	.028
夫は私の話をよく聞いてくれる。	.790	-.113	-.060	.014
夫は私を信頼し、尊敬してくれている。	.774	-.153	-.132	.094
夫は私の仕事・活動を理解し、支えてくれている。	.773	-.169	-.019	.052
私は夫の悩み事を、親身になって一緒に考えている。	.734	-.125	-.037	.109
夫はこれからも一家を支えてくれる。	.732	-.056	.068	.033
私は夫の話をよく聞いてあげる。	.705	-.086	-.060	.096
私は夫の仕事・活動を理解し、支えている。	.682	-.092	-.032	.104
今の生活には「自分」というのがないような気がする。	-.144	.697	.168	-.068
毎日同じことの繰り返しでむなしい。	-.123	.650	.199	-.064
今の生活には刺激が少ない。	-.117	.622	.166	-.076
本当にやりたいことをやっていない焦りや不安を感じる。	-.113	.616	.234	-.016
社会から取り残されているように感じる。	-.034	.577	.187	-.009
自分の人生はこのままで良いのかと不安になる。	-.300	.575	.195	-.027
人間関係が狭く、つまらない。	-.060	.554	.192	-.066
だいたいにおいて自分に満足している。	.252	-.430	-.175	.232
自分の気分で子どもに感情的にあたる。	-.092	.091	.662	-.110
子どもに対する日々の接し方で反省することが多い。	-.026	.151	.579	-.001
子どもに注意すれば逆効果だと思いながら、つい言ってしまう。	.003	.122	.573	-.008
よい子に育て上げねばならないとストレスを感じる。	.037	.297	.532	.079
子どもが言うことをきかないと、思わず手がでることがある。	-.064	.047	.521	-.158
子どもに自分の都合をおしつけている。	-.085	.045	.517	-.081
子どもがちゃんとしてくれないと、私が困る。	.057	.240	.516	-.037
子どものささいな言動が気になって仕方がない。	-.054	.299	.503	.017
ほかの子と自分の子をつい比べてしまう。	.075	.171	.446	.018
夫に対するイライラや不満を代わりに子どもにぶつける。	-.070	.149	.444	-.124
子どもに対する愛情をうまく表せない。	-.104	.301	.418	-.305
子どものことがかわいくて仕方がない。	.073	-.140	-.202	.657
子どもの成長に最も喜びを感じる。	.126	-.110	-.094	.608
親であることに充実感を感じる。	.173	-.251	-.143	.520
子どもとの関係が、べったり密着している。	.019	.106	.053	.450
寄与率	18.81	10.57	10.33	4.74
累積寄与率	18.81	29.37	39.71	44.44
係数	.938	.849	.828	.641

(3) 育児期女性の生活・家族感情：生活・家族感情を検討する下位次元として因子分析による4次元が抽出されたが、4次元ごとに求めた対象者全体の平均値は表2の通りである。4因子のうち、最も平均が高かった因子は「子育ての楽しさ・喜び」であり、最も低かった因子は「生活への不安・焦燥感」であった。

表3 生活・家族感情尺度の各因子平均値

	平均値	標準偏差
良好な夫婦関係	2.87	0.56
生活への不安・焦燥感	2.22	0.57
子育てへの否定的な態度	2.50	0.46
子育ての楽しさ・喜び	3.07	0.47

全体的にみると、子育てを楽しむ喜びを感じ、子育て生活へ不安や焦りをあまり感じていない結果となっている。しかし、社会経済的属性との関連から検討すると育児期女性の生活・家族感情についてあらたな側面をみることができる。ここでは、生活・家族感情の各因子について、対象者の学歴と就労形態から分析する。

(4) 社会経済的属性と生活・家族感情との関連：

学歴

生活・家族感情の各因子について、対象者の最終学歴による一元配置の分散分析を行った。最終学歴の群わけは、中学校卒（20人）、高校卒（313人）、専門学校卒（231人）、短大卒（203人）、大学卒（182人）、大学院卒（9人）の6群である。学歴別の各因子の平均値と標準偏差、および分散分析の結果は表3の通りである。多重比較はTukey法を使用した。

表3 学歴からみた生活・家族感情尺度

	良好な夫婦関係		生活への不安・焦燥感		子育てへの否定的な態度		子育ての楽しさ・喜び	
	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
中学卒	2.64	0.65	2.38	0.68	2.53	0.38	3.15	0.49
高校卒	2.83	0.58	2.26	0.59	2.53	0.45	3.08	0.47
専門卒	2.81	0.56	2.28	0.56	2.58	0.44	3.03	0.47
短大卒	2.91	0.55	2.18	0.54	2.45	0.47	3.07	0.47
大学卒	2.99	0.51	2.11	0.54	2.40	0.46	3.07	0.46
大学院卒	3.25	0.34	1.85	0.35	2.22	0.38	3.08	0.33
F値	4.64	***	4.23	**	5.30	***	0.52	n.s.
自由度	(5, 1035)		(5, 1042)		(5, 1034)		(5, 1044)	
多重比較	中学卒<大学院卒 *		高校卒>大学卒 *		高校卒>大学卒 *			
	高校卒<大学卒 *		専門卒>大学卒 *		専門卒>短大卒 *			
	専門卒<大学卒 *				専門卒>大卒 ***			

p<.05 * p<.01 ** p<.001***

学歴による有意差があったものは、「良好な夫婦関係」(F=4.64 p<.001),「生活への不安・焦燥感」(F=4.23 p<.01),「子育てへの否定的な態度」(F=5.30 p<.001)であった。「良好な夫婦関係」は中学卒よりも大学院卒の方が、高校卒よりも大学卒の方が得点が高く、高学歴である妻ほど良好な夫婦関係を認識していた。「生活への不安・焦燥感」は大学卒よりも高校卒、専門学校卒の方が得点が高く、今の生活に対して不安や焦りを感じていた。また「子育てへの否定的な態度」においては、大学卒よりも高校卒、専門学校卒の方が、短大卒よりも専門学校卒の方が得点が高く、子育てに対して

否定的な態度をとっていると感じていた。

現在の就労形態

就労形態別にみた生活・家族感情各因子の違いは表4の通りである。就労形態はフルタイム(478人)、パートタイム(257人)、専業主婦(224人)の3群である。

表4 現在の就労形態からみた生活・家族感情尺度

	良好な夫婦関係		生活への不安・焦燥感		子育てへの否定的な態度		子育ての楽しさ・喜び	
	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
フルタイム	2.90	0.56	2.09	0.53	2.43	0.44	3.08	0.46
パートタイム	2.83	0.57	2.27	0.55	2.54	0.45	3.07	0.48
専業主婦	2.86	0.55	2.36	0.62	2.57	0.47	3.04	0.46
F値	1.42	n.s.	20.03	***	8.68	***	0.52	n.s.
自由度	(2, 939)		(2, 944)		(2, 936)		(2, 947)	
多重比較			フルタイム<パート *** フルタイム<専業主婦 ***		フルタイム<パート *** フルタイム<専業主婦 ***			

p<.001***

「生活への不安・焦燥感」(F=20.03 p<.001)と「子育てへの否定的な態度」(F=8.68 p<.001)の2因子において職業形態による群間に有意な差がみられた。その差の方向は、いずれの因子においてもフルタイム就労者よりパートタイム就労、もしくは現在就労をしていない専業主婦の方が高得点となっていた。

学歴と就労コースとの関連からみた生活・家族感情尺度

の結果から、就労形態が育児期女性の感情、特に自分自身の生活や子育てに対する態度のネガティブな側面において影響を与えている可能性が示唆された。この結果は、結婚や子育てのため退職するかどうかという要因の影響が育児期女性の気持ちに及ぼしている可能性も考えられるため、結婚・出産前の就労形態から現在の就労形態までのコースごとに生活・家族感情を検討する。その際、学歴が社会移動をより可能にする先行研究の指摘を考慮し、就労コース⁴別分析を行うにあたって、学歴の要因もあわせて2元配置の分散分析を行う。就労コースは、継続フルタイム(384人)、継続パート(66人)、中断フルタイム(92人)、中断パート(275人)、中断専業主婦(224人)の5群である。尚、大学院卒に関しては現在無職の者はおらず、全員何らかの形態で就労をしている。

結果を次元ごとにみてゆこう。まず、「良好な夫婦関係」においては、学歴の主効果(F=3.38 p<.05)が見出された。また学歴と就労コースとの間に交互作用の傾向(F=1.57 p<1.0)が認められた。このことは、図1において仕事を継続してきた、あるいはフルタイムで働いている高学歴女性において夫婦関係が良好であると認識する傾向があることがみとれる。

⁴ 就労コースは初職から現在までの就労形態を尋ねた回答から作成された変数で、職業の形態(フルタイム/パートタイム/無職)と就労継続/中断との組み合わせによる5群が設定される。詳細は柏木(2003)報告書を参照のこと。

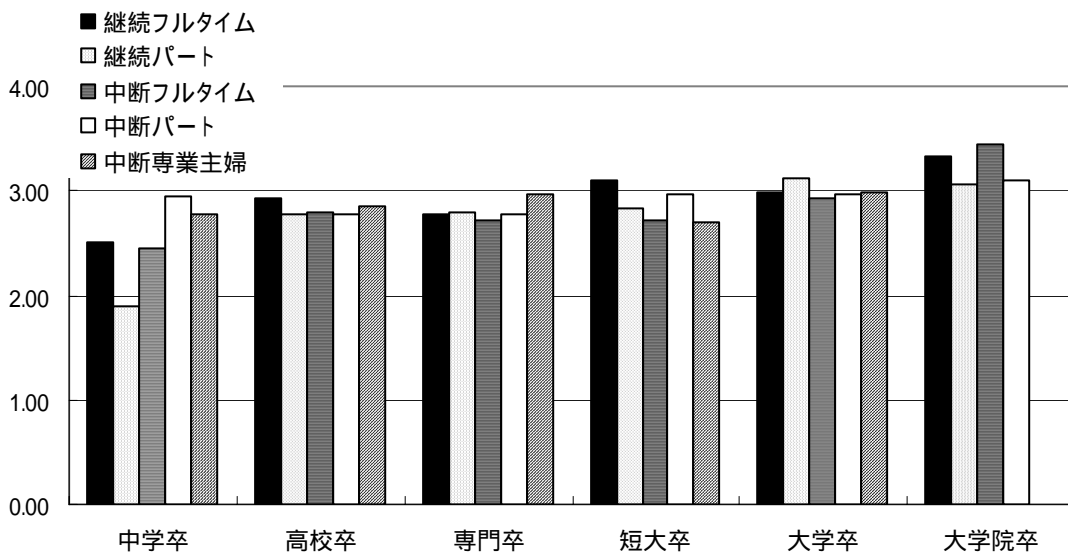


図1 良好な夫婦関係

次に「生活への不安・焦燥感」においては、学歴 ($F=2.57$ $p<.05$) と就労コース ($F=4.19$ $p<.01$) の主効果がみられた。また、就労コースによる多重比較 (Tukey 法) の結果、継続フルタイムと中断フルタイム (継続フルタイム平均 2.06, SD.03, 中断フルタイム平均 2.24, SD.06 $p<.05$), 中断パート (中断パート平均 2.27, SD.03 $p<.001$), 中断専業主婦 (中断専業主婦平均 2.36, SD.04 $p<.001$)

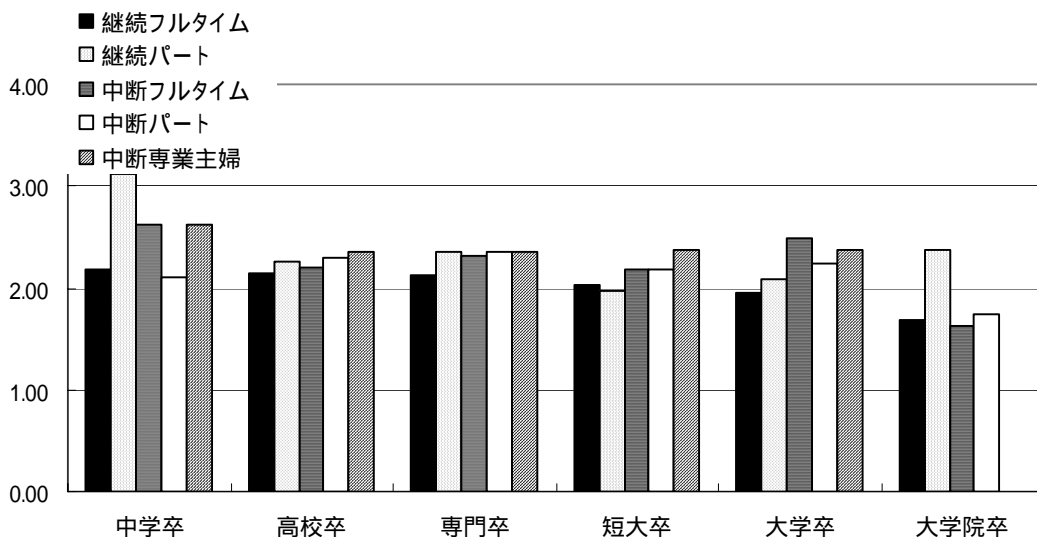


図2 生活への不安・焦燥感

それぞれとの間に有意な差があった。先にみた現在の就労形態による比較の結果と同様、継続フルタイム群および中断フルタイム群は、生活への不安・焦燥感是他群よりも低くなっており、特に継続フルタイムは生活・家族感情が最も良好であることがわかった。

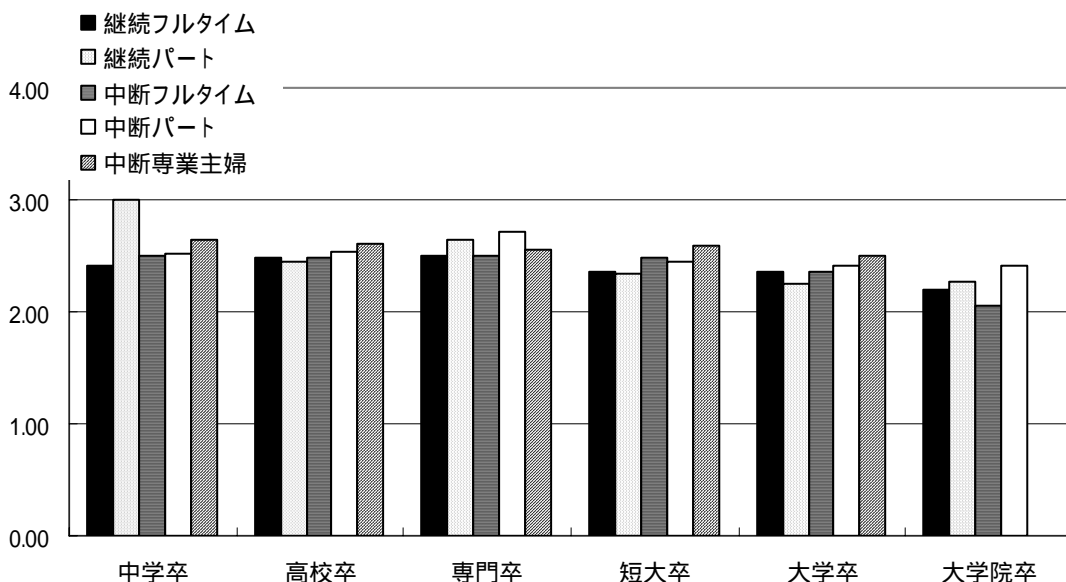


図3 子育てへの否定的な態度

第三の次元の「子育てへの否定的な態度」においては、学歴による主効果のみみられた ($F=3.58$, $p < .01$)。また、就労コース間の多重比較 (Tukey 法) の結果、継続フルタイムと中断パート (継続フルタイム平均 2.42, SD.02, 中断パート平均 2.54, SD.03 $p < .01$)、中断専業主婦 (平均 2.57, SD.03 $p < .01$) との間に有意な差が認められた。中断パート群、特に中断専業主婦群の子育て感情は継続フルタイム群よりも悪いことが示された。

現在の社会状況からみて、女性の退職後、子どもを育てながらフルタイム就労する機会は多くなく、上記のように再就労がパート就労である者の育児感情がネガティブであることを考えると、夫の育児参加や、今後の雇用者側の意識の改革、つまりより充実した育児支援の整備が必要であろう。

また、中断後就労しない者も子育てへの否定的な態度が多くなっている点に対しても、再就労希望しない理由や再就労できない状況について今後明らかにしていく必要があるだろう。子どもへの否定的態度が虐待へつながる可能性も考えられるため、解決が急がれる課題と言えるだろう。

「子育ての楽しさ・喜び」は4因子中最も得点の高かった因子であるが、学歴や就労コースによる比較検討を行った結果、有意な群間差は認められなかった。親は、子育てを楽しんでいると感じ、子どもの成長を喜ぶ存在であることは疑いのないことだと思われる。しかし、柏木(1994)が指摘するように、子育てに対して楽しさや喜びを感じつつ、ネガティブな気持ちをあわせもつことが育児に主に関与する養育者のアンビバレントな感情であることを考えると、この結果は育児期女性の生活・家族感情のひとつの側面であると考えられる。今後は、各次元との相互関係から捉えることが必要であろう。

本研究において、生活・家族感情尺度の作成を試みたが、現在の育児期女性の気持ちをとらえるものとして有効な因子を得ることができたと判断された。

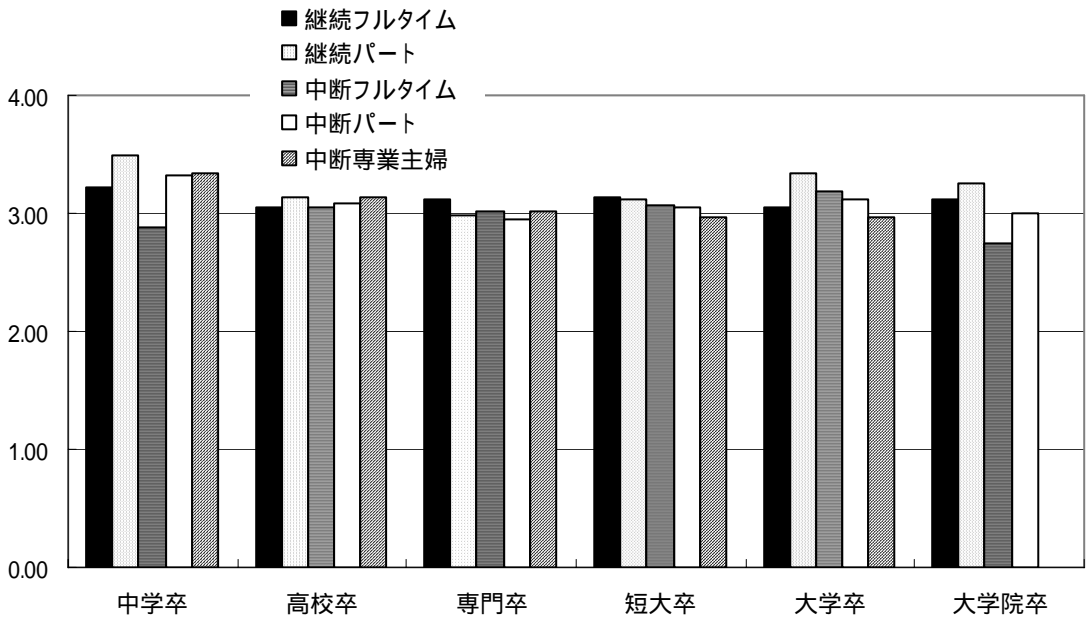


図4 子育ての楽しさ・喜び

学歴と各因子との関連からは、育児期女性は比較的高学歴の人ほど生活や家族に対してポジティブな感情を持っていること、また、「生活への不安・焦燥感」や「子育てへの否定的な態度」における認識は他と比べて低いことが明らかとなった。

現在の就労形態別に各因子を比較してみたところ、フルタイム就労の女性よりもパート就労、専業主婦の方が生活への不安・焦燥感を感じており、子育てへの否定的な態度をとっていた。専業主婦の子育て生活における閉塞感はいくつかの報告されていることであり(柏木, 1994), 今回も同様の結果が得られた。

専業主婦の問題は学歴と就労コースの分散分析の結果でさらに明らかにされたといえる。「生活への不安・焦燥感」の図2のグラフをみると中断専業主婦の不安・焦燥感が他のコースと比べるとどの学歴群より感じているが、短大卒と大学卒という高学歴群においては同じ学歴内の他就労コースの女性よりも高くなっている。子育てのために仕事を中断しその後専業主婦であり続けた結果だと思われるが、精神的健康面からみても夫や夫の両親が育児期女性の就労再開を阻む圧力をかける(平山, 2003)など専業主婦であり続けた理由や要因を今後検討する必要があると思われる。

また「子育てへの否定的な態度」(図3)も同様で、高学歴女性における専業主婦はより子どもに対して否定的な態度で接してしまうことがあるということが示唆された。この結果を補うように「子育ての楽しさ・喜び」は高学歴専業主婦が高学歴他就労コースの女性と比べて得点が低くなっていた。

このような結果は、社会移動を促進するような学校教育を受けている女性が達成感や意欲をもって生活を送りたいと願う場合、さらに深刻な問題となるであろう。母親自身だけでなく子どもの成長・発達を考えるうえにおいても重要な問題である。今後、生活に不安・焦燥感をもち、子育てに対して

否定的な態度をとる女性は、その状態が極端になると育児ストレス、育児ノイローゼになる可能性が考えられるため、抑圧的な心理状態で生活をおくっている女性のそうならざるをえない要因についてさらに検討する必要があるであろう。

引用文献

- 東 洋・柏木恵子.(1999). *社会と家族の心理学*. ミネルヴァ書房.
- 平山順子・柏木恵子. (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？. *発達心理学研究*, 12, 216-227.
- 平山順子. (2003). 育児期男性が妻の就労に賛成・反対した理由：妻の現在の就労形態との関連. *日本家族心理学会第20回大会論文集*. 61.
- 柏木恵子・若松素子.(1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5, 72-83.
- 柏木恵子. (2003). *育児期女性の就労中断に関する研究 - なぜ仕事を辞めるのか？辞めるとどうなるのか？ -*. With You さいたま 埼玉県男女共同参画推進センター共同研究報告書.
- 柏木恵子. (2003). *家族心理学 - 社会変動・発達・ジェンダーの視点*. 東京大学出版会. 111-112.
- 文部省.(1999). 学校基本調査報告書.
- 永久ひさ子.(1995). 専業主婦における子どもの位置と生活感情. *母子研究*, 16, 50-57.
- 中村牧子.(1999). 高学歴化と女性の移動. *岐阜を考える*. 岐阜県産業経済研究センター.
- 田中重人.(1997). 高学歴化と性別分業：女性のフルタイム継続就業に対する学校教育の効果. *社会学評論*, 48, 130-142.

<謝 辞>

本調査研究を行うにあたり文京学院大学の柏木恵子教授にご指導を賜りましたこと感謝申し上げます。共同研究者である平山順子さん、小坂千秋さん、平賀圭子さん、飯島絵理さんには質問紙作成の段階から分析に至るまで多くの助言を頂きました。また、田矢幸江さんには研究に関わる事務全般を担っていただき、感謝申し上げます。

<付 記>

本研究は埼玉県男女共同参画推進センター“With You さいたま”から助成を受けた共同研究であり、その調査データの一部を使用し分析を行った。

